



昭和15年秋の「陸軍記念日」に撮影。前列の兵隊さんに抱かれているのが本人。

『私は忘れない』 町田典子

あの戦争がなかったらと、どれ程の人が思ったことだろう。

戦後七十六年悲惨な戦争を語る人も少なくなってきた。時代は昭和から平成、令和と続き悲しいことに今でも世界のどこかで戦火は絶えない。昭和二十一年晩秋、私達一家は着の身着のまま、終戦を迎えた満州（現・中国東北部）から祖国佐世保港に到りつく。引揚げ船興安丸は3000人以上の邦人で溢れていた。十分な食料もなくさつまいものつるを海水で煮たものとわずかなカンパンだけである。幼い子、年寄りの命が毎日のように船内から消えた。遺体を内地まで連れてゆくことが許されず、興安丸は一時停留し小さなボートに移され沖の方に捨てられた。泣き叫ぶ遺族の姿は今でも目に焼きついて、八月十五日が近づくとトラウマの様に夢に出る。途中で死んでもいいと九才の私と四才の弟、一才の妹を連れて帰ってくれた父も母も今は亡く、あの悲惨な体験を語れるのは私一人となった。

330万人を超える尊い命が戦火に散り、辛酸な戦争体験を余儀なくされた多くの人を忘れてはならない。

私にとって昭和二十年八月十五日は遠くて近い。命があつての平和で幸福であり、生命の大切さを実感する。

幸いにして私達親子はその後、父の実家である埼玉県広田村に居候となる。ハダカ一貫の私達は当然招かざる客であった。軍人であった父は敗戦の喪失から立ち上がり、生きるために家族を守るために、ブローカーのような仕事をしていた。昭和二十四年日野市日野台に小さな家を構え家族を支えてくれた。決して諦めてはいけない！と教えてくれた父、強さと優しさを教えてくれた母の愛はその後の私の人生の指標となった。赤い夕日の大地に置き去りにされた子供達、ソ連兵の侵攻で命を落した人を思う。平和の尊さ、命の重みを次世代に伝えていかねばならない。

今、世界中が新型コロナウイルスという未知のウイルス感染が拡大し戦後最大の試練とも云えるが、私は、あの体験があるから乗り切れる。

2021年10月20日録音。現在85歳。

戦後日野市に暮らし、現在、弟家族が日野市に暮らしています。

「音筆」で右をタッチすると、
本人による朗読が聞けます。

